

## 2 節 善い業の意義

2-① 神の戒めに服従してなされるこのような善い業は、生きた信仰の実り、また証拠である。

「しかし、『あなたには信仰があり、わたしには行いがある』と言う人がいるかもしれませんが。行いの伴わない信仰を見せなさい。そうすれば、わたしは行いによって、自分の信仰を見せましょう。……アブラハムの信仰がその行いと共に働き、信仰が行いによって完成されたことが、これで分かるでしょう。」

⊕

ヤコブの手紙 2・18,22

※ヤコブ 2・18-26 は、パウロの信仰による義認（ローマ 3・22,24）論と対立するかのよう、行いによる義（ヤコブ 2・24）を言っているように見える。この箇所は、当時のカトリックの護教家との論争にもなっていたらしく、宗教改革の基本的理念に反するととらえられかねないので、『綱要』では、かなりのスペースを割いて、この聖書の箇所を解説している。

カルヴァンは、この箇所を論証するに当たって、まず、当時の教会において不信仰者が、信仰をひけらかしていた状況を説明したあとで、「信仰」と「義とする」という二つの語について誤った理論展開がなされたと説明する。少し長くなるが引用する。

「御霊はパウロの口を通して『アブラハムは行いによってでなく信仰によって義を得た』と明言する。我々も『全ての人は、律法の行いによらず信仰によって義とされる』と教える。同じく、御霊はヤコブによって、『アブラハムも我々も、ただ信仰のみによってでなく行いによる義によって立つ』と教えたもう。……それでは、この両者はいかにして調和する

か。・・・・このことを明らかにするため、我々は先ず使徒の目標がなんであったか、次に反対派(※カトリックの護教家)がどの点で妄言を吐いているかを観察しよう。その頃、己の不信仰を露骨にひけらかしておよそ信仰者の固有な行いをみな否定し無視しながら、信仰の名義を偽り誇ることをやめない多くの者がいた。(この悪は教会にはいつも見られる永久的なものである)。このような愚かしい自信をヤコブは嘲笑しているのである。したがって彼の意図は、まことの信仰の力をどの部分においても減じることなく、むしろこの駄弁家どもが信仰の空虚な外面を僭越に誇ってこれに満足し、一切の悪徳を気儘に振る舞いつつ能天気<sup>い</sup>に溶け去っていくに過ぎないことを示すことにある。この状態を理解すれば、我々の反対者がどの点で間違ったのかを検証することは容易である。つまり、二重の誤った理論展開に落ち込んだのである。一つは(信仰)という語について、一つは(義とする)という動詞についてである。使徒(※ヤコブ)が信仰の真実から遥かに空しい見解を(信仰)という名で呼んだのは、本筋から外れたのではなく譲歩したからである。使徒は初めに、『私の兄弟たちよ、もし誰かが信仰を持つと言いながら行いがなければ、何の益になろうか』という言葉を示している。使徒は『行いなき信仰を持つならば』と言っているのではなく、『それを誇るならば』と言おうとしているのである。少し後で、それは『悪魔の知識よりもっと悪い』と言い、さらに明瞭にするためにこれを笑いものにし、最後には『死んだ信仰』と言う。その言わんとするところは定義を下す段で十分に把握できる。曰く、『あなたは神が在<sup>いま</sup>すと信じている』。神が存在すると信じているだけのことなら、この信仰が義とする働きをしな<sup>い</sup>いとしても驚くことはない。・・・・真の信仰はどのようにして義とするのか。それは、信仰が我々をキリストと結び付け、彼と一つにし、彼の義

に与ってその実を享受することによってではないか。したがって、信仰が義とするのは、神的本質についての知識を理解したからではなく、神の憐れみの確かさに任せ切るからである。」(綱要) 3-17-12

次に「義とする」という語をアブラハムとイサクの物語(創世記 15・6、22・16-18)を考察した上で、次のように結論付ける。

「謂わば(※ヤコブは、)『真の信仰によって義とされた者は、その義を服従と善き行いによって証明するのであって、言葉だけの信仰という幻影によって証明するのではない』と言ったのだ。要するにヤコブは我々が義とされる理由を論じたのでなく、信仰者に、行いによって義を実践していることを要求しているのである。パウロが行いの助けなしで義とされることを主張したように、ヤコブにとっては、善き行いを欠いた者が義であると見られていることは忍び得ないことであった。この目的を考察すれば全ての困惑から解放されるであろう。我々の反対者が間違いを犯した主要点はこちらにある。ヤコブの努力は、善き行いを軽視しながら信仰を口実とする空虚な言い分に逃れる者らの邪悪な安心を打破することに他ならなかった。それなのに、反対者らはそれを義認の理論の定義にしようとしたところに間違いがある。したがって、反対者がどのようにねじ曲げようとも、ヤコブの言葉はこの二つの見解の表明以外の何ものでもない。『信仰の無内容な見せかけによっては義とされることはない。』及び『信仰者はこのような観念では満足せず、その義を善き行いによって明らかにするものである。』(綱要)3-17-12

## 2-② 信仰者は、この善い業によって自らの感謝を表す。

「主が、ことごとく私に

良くしてくださったことについて

私は主に何をお返ししようか。

私は救いの杯をかかげ、

主の御名を呼び求めよう。」 ㊦

#### 詩篇 116・12,13

「しかし、あなたがたは、選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神の所有とされた民です。それは、あなたがたを、やみの中から、ご自分の驚くべき光の中に招いてくださった方のすばらしいみわざを、あなたがたが宣べ伝えるためなのです。」 ㊦

#### ペテロの手紙 第一 2・9

**2-③ 信仰者は、神の戒めに服従してなされる善い業によって、信仰の確信を強める。**

「もし、私たちが神の命令を守るなら、それによって、私たちは神を知ることがわかります。……みことばを守っている者なら、その人のうちには、確かに神の愛が全うされているのです。それによって、私たちが神のうちにいることがわかります。」 ㊦

#### ヨハネの手紙 第一 2・3、5

「こういうわけですから、あなたがたは、あらゆる努力をして、信仰には徳を、徳には知識を、知識には自制を、自制には忍耐を、忍耐には敬虔を、敬虔には兄弟愛を、兄弟愛には愛を加えなさい。これらがあなたがたに備わり、ますます豊かになるなら、あなたがたは、私たちの主イエス・キリストを知る点で、

役に立たない者とか、実を結ばない者になることはありません。これらを備えていない者は、近視眼であり、盲目であって、自分の以前の罪がきよめられたことを忘れてしまったのです。ですから、兄弟たちよ。ますます熱心に、あなたがたの召されたことと選ばれたこととを確かなものとしなさい。これらのことを行って行けば、つまりくことなど決してありません。」 ㊦

ペテロの手紙 第二 1・5-10

※この聖句に対するカルヴァンのコメント。

「見よ、行いは神の前に人を義としないが、全て神から来る者は再生されたものであり、新しく創造された者である。彼らは罪の王国から義の王国へと移され、この証拠によって彼の召されたことは確かにされる(Ⅱペテロ 1・10)。それはちょうど木がその実によって知られるのと同じである。」(綱要)3-15-8

2-④ 信仰者は、神の戒めに服従してなされる善い業によって、兄弟姉妹たちを向上させる。

「私はあなたの熱意を知り、それについて、あなたがたのことをマケドニアの人々に誇って、アカヤでは昨年準備が進められていると言ったのです。こうして、あなたがたの熱心は、多くの人を奮起させました。」 ㊦

コリント人への手紙 第二 9・2

※「コリントの教会が昨年、熱意をもって募金にとりかかったことは、マケドニアの諸教会に対する模範となり、多くに人を刺激して、募金のために奮起させた。それにもかかわらず、募金を完了しなかったら、マ

ケドニアの諸教会にそのことを誇ったパウロも、コリントの人々も恥をかくことになる。」(脚注)

「そのように、あなたがたの光を人々の前で輝かしなさい。人々が、あなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである。」 ⑧

#### マタイによる福音書 5・16

※「善い行いは、ただ神との関係でなされるものではない。というのは、信者は『彼らの兄弟たちを建て上げる』ために、すなわち、キリスト教会の他のメンバーたちを築き上げ、益するために、善い行いを用いることもできるからである。どの教会にも、その人たちが重要な人物だからではなく、その言葉と行いが他の人に対する深い関心と思いやりで味付けされているゆえに、彼らが接し、あるいは挨拶するすべての人々に対して目立たない形で非常に大きな祝福となっている人々がいる。」(註解)

2-⑤ 信仰者は、神の戒めに服従してなされる善い業によって、福音の告白を飾る。

「慎み深く、貞潔で、家事に励み、優しく、自分の夫に従順であるようにと、さとすことができるのです。それは、神のことばがそしられるようなことのないためです。

.....

奴隷には、すべての点で自分の主人に従って、満足を与え、口答えせず、盗みをせず、努めて真実を表わすように勧めなさい。それは、彼らがあらゆることで、私たちの救い主である神の教えを飾るようになるためです。というのは、すべての人を救う神の恵みが現われ、」 ㊦

テトスへの手紙 2・5、9-11

「くびきの下にある奴隷は、自分の主人を十分に尊敬すべき人だと考えなさい。それは神の御名と教えとがそしられないためです。」 ㊦

テモテへの手紙 第一 6・1

※「福音の信頼性が最も説得力を持つのは、信者たちが自分の信仰について単に語るだけでなく、神がわれわれにお求めになる善いことを実際に行うことによって〈福音の公的告白を美しく飾る〉ときである。」(註解)

2-㊦ 信仰者は、神の戒めによってなされる善い業によって、敵対者の口を封じる。

「善を行って、愚かな者たちの無知な発言を封じることが、神の御心だからです。」 ㊦

ペテロの手紙 一 2・15

※「善い行いは、信ずることを拒む福音の〈敵対者たち〉の批判を封じる最も効果的な手段となる。」(註解)

2-⑦ 信仰者は、神の戒めによってなされる善い業によって、神の栄光を顕す。

「また、異教徒の間で立派に生活しなさい。そうすれば、彼らはあなたがたを悪人呼ばわりしてはいても、あなたがたの立派な行いをよく見て、訪れの日に神をあがめるようになります。」 ⑦

ペテロの手紙 一 2・15

※「訪れの日」は神に逆らっている者が恵みに引き入れられる日。(脚注)

2-⑧ 信仰者は、神の作品であって、善い業をするようにキリスト・イエスにおいて造られた。

「私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをもあらかじめ備えてくださったのです。」 ⑧

エペソ人への手紙 2・10

2-⑨ 信仰者は、善い行いによって、聖さに至る実を結んで、終局目的である永遠の命を得ることを目指す。

「あなたがたは、今は罪から解放されて神の奴隷となり、聖なる生活の実を結



んでいます。行き着くところは、永遠の命です。」 ㊦

#### ローマの信徒への手紙 6・22

※善い行いによつては、我々は義とされないが、善い行いは、この世でなく、天に宝を積むことであり、天の宝のことをカルヴァンは、「永遠のいのちにいたる浄福」(綱要 3-18-6)であると表現する。「永遠の命」と「善い行い」との関係を言ったカルヴァンの論を見てみよう。

『この世の富める者を戒め、彼らが高ぶった知恵を持たず、不確かな富に望みを置かず、生ける神に望みを置き、善き行いを為し、善き行いに富む者となり、来るべき世のための良き基礎として宝を蓄え、こうして永遠の命を捉えるに至らせよ』(I テモテ 6・17-19)。ここで富になぞえられるのは、善き行いの実として受ける永遠の命の浄福である。……キリストが※『あなたがたは地上に富を積んではならない。……富は天に積みなさい。……あなたがたの富のあるところに、あなたの心もあるのだ。』(マタイ 6・19-21)と言われたことが真実ならば、この世の子らが現世の生の快樂となるものを集めることに熱中するのが常であるのと同じく、信仰者らはこの生が夢のごとくにたちまちに消え失せるのを学び取ったからには、真に享受しようとするものを揺るがぬ生のある所に移すのである。したがって、永久に生きる座として選んだ場所に移り住もうと志している人々を、我々の倣う者とすべきである。彼らは財産を前もってそこに送り込み、一時的な欠けがあっても苦痛と思わない。なぜなら、将来長くいる所により多くの良きものを持つ方が至福であると考えからである。天こそ祖国であると信ずるなら、突然の移住によって失われるこの地上に留めるよりも、我々の富をそちらに移しておくべきである。しかしどのようにして移すのか。貧しい人々の窮乏と分かち合えばよい。貧しい人たちに贈られ

たものを主は御自身に与えられたものとしたもう(マタイ 25・40)。・・・・すなわち、愛の義務によって兄弟のために支出するだけ、その分が主の御手に預けられる。主は忠実な受託者としていつか多額の利子を添えて返したもう。そこで我々の務めは、神の前では謂わば御手の内に隠された宝のようなものではないだろうか。・・・・我々が神に示す服従は一瞥にも値しないにもかかわらず、神は我々を善き行いに励ますためにその一つすら滅び失せることを許したまわない。」(綱要) 3-18-6

※ 2節のまとめとして、(解説)が簡潔にまとめているので引用する。

「ここ(※2節)では、聖書のいたる所で教えられている善行(よきわざ)の意義が列記されている。・・・・これらの聖句(※2節の各証拠聖句)で言おうとしている根本的な意味は、善行が救いの恵みから生じ、それは自分の心情のみでなく、他の者の信仰的まなこにも、恵みを証しするものであり、第二原因としての神の救いのみ業(※神が善行をさせるというみ業)の一端を構成するということであって、功績的な意義(※カトリックの教理)、すなわち、この善行が救われることの原因や条件となるのではないということである。)」(解説)